

## エキゾチックと未知の間

——東ヨーロッパから見た日本哲学研究の意義と課題——

Roman Pasca

東ヨーロッパにあるルーマニアではここ数年、日本語学習者・日本研究者が増加しつつあり、日本語教育と日本研究が発展の一途を辿っていると言えよう。近年、日本文学・日本美術史・日本民俗学・文化人類学などの分野で活躍している研究者がルーマニア国内のみならず世界中で研究活動を行ったり研究成果を報告したりしている。

しかし、日本哲学研究においては、発展しているとは言えず、現状としてエキゾチックと未知の間で聞き合いが続いている状態であると言っても過言ではない。その主な理由として、以下の問題点が考えられる。

①日本哲学の研究者が育てられる環境が整っていない。  
ブカレスト大学や他の国立大学には日本語学科が存在するが、外国語学部内に設置されており、哲学部や文学部などとの横の連携がなされていない。さらに、日本語学科では日本哲学

の授業が提供されておらず、外国語学部の学生が日本語ができて日本哲学の知識がない、哲学部の学生が日本哲学に興味があっても日本語ができないという、悪循環のような状況が生じている。

②教育制度上の問題で、情報へのアクセスが限られている。  
ルーマニアはEU加盟国ではあるが、教育制度上では研究環境が整っているとは言いがたい。幾つか例を挙げてみると、日本哲学の書籍が入手できない、日本で研究するための研究費が調達できない、周りに指導や相談ができるスペシャリストがいない、などが挙げられる。

以上の①と②の結果として、例えば日本哲学の書のルーマニア語訳は数が非常に少なく、しかもそのすべてが重訳である。日本哲学の研究者が孤立しており、ネットワークが形成されていない。などといった現象が起きている。

本発表では、以上のような問題点や課題を紹介・分析しつつ、ルーマニアのみならずその隣国のブルガリア、ウクライナ、ハンガリーなどの現状にも触れながら、東ヨーロッパにおける日本哲学研究の意味について考えてみたい。最後に、日本哲学を世界哲学という枠の中で捉え直す試みの意義についても触れていきたい。

(発表趣旨)

(ロマン・パシユカ、日本近世哲学、京都大学文学研究科助教)